

ことわざから見た韓日両国の親子関係

魯 成 煥

日語日文学科

(1982. 10. 30 접수)

〈日文要旨〉

ことわざは民間にひろく分布されている教訓・諷刺・處世などを含む人間生活の智慧である。また、ことわざは、各時代の実相をよく反映しているものであって、その郷土性と時代性をも表す社会の共通な経験や知識の集約であり、結晶なのである。

このようなことわざが、昔から韓国では「상말」・「상인소리」・「결말」・「덧말」・「俗諺」・「俗説」・「俗言」・『俚諺』・『野言』・『野語』⁽¹⁾と通称されたし、日本においても、時代と場所によって、多少なり差があるが、『譬』・『世語』・『名口』・『諺』・『俚諺』・『俗諺』・『諺話』⁽²⁾等、多様な言葉として通用された。こうしたことわざに関して、

權榮圭は、「ことわざと言うのは、民衆生活における一つの集約的表現として輿論の精髄であり、社会の反映で人情の鏡である」⁽³⁾と言った。そして、

金思煥は「ことわざは、その民族・その国家の特質が過去と現在にわたって、縮少・凝結されていることとして、学的対象、特に民族心理学的面において好個の対象になる」⁽⁴⁾と言っている。

また崔根學は「ことわざは祖先から譲られた精神的・道徳的な遺産として、われわれは、それを後世の人々に伝えてやる義務と責任を持つのである」⁽⁵⁾と言った。

このように、ことわざの研究の必要性と重要性を強調した人々は多くある。

したがって、本稿は、現代の生活にも、しきりに用いられていることわざを、特に韓日両国の親子に関するを中心にして考察することによって、しだいに衰退している民衆のことわざへの知識をたかめるのに、多少なりとも、寄与するのが筆者の意図である。

俗談을 통해서 본 韓日両国の 親子関係

魯 成 煥

日語日文学科

(1982. 10. 30 접수)

〈国文要旨〉

俗談은 民間に 널리 分布되어 있는 教訓・諷刺・處世 등을 포함하는 人間生活의 智慧이다. 그리고 또한 俗談은 各時代의 實相을 잘 反映되어 있는 것이기 때문에 그 郷土性과 時代性도 나타내는 社會의 共通의 経験과 知識의 集約이며 結晶인 것이다.

이와같은 俗談은 古來로부터 韓國에서는 『상말』・『상인소리』・『결말』・『덧말』・『俗諺』・『俗説』・『俗言』・『俚諺』・『野言』・『野語』로 通稱되었으며, 日本에서도 時代와 場所에 따라서 多少 差異가 있지만 『譬』・『世語』

(1) 金思煥「俗談論」大建出版社(1953)年, p.8.

(2) 鈴木栄三編「ことわざとことわざ集」(1979)年

(3) 権榮圭「俗談論-통해본 우리 民族性」中央大語文論集 第12輯(1977)年.

(4) 金思煥「俗談論」大建出版社(1973)年.

(5) 崔根學「俗談辭典」(1968)年.

·『名言』·『諺』·『俚諺』·『俗諺』·『諺語』등 多様하게 通用되어 있다.

이러한 俗談에 對해서,

權榮生는 “속담이란 民衆生活의 한 集約的 表現으로서 興論의 精髓이며” 社會의 反映이요, 人情의 表現이다”고 하였고,

金思燁은 “俗談은 그 民族, 그 國家의 特質이 過去와 現在에 걸쳐 縮少·凝結되어 있는 것으론, 學的對象, 特히 民族心理學的面에 있어서 好個의 대상이 된다”고 하였다.

그리고 崔根學은 “俗談은 祖上으로 부터 물려받은 精神的·道徳的 遺產으로서 지금 우리를 그들을 後繼에 전해 주어야 할 義務와 責任을 가지는 것이다”고 하였던 것을 치면 俗談研究의 必要性과 重要性을 切實히 強調했다. 따라서 本稿는 現代生活에 있어서도 자주 使用되고 있는 俗談을 特히 韓日兩國의 父母와 子息에 関한 ことを 中心으로 考察해봄으로써 점차로 쇠퇴되어가는 民衆들의 俗談에 對한 知識을 舒이는데 少寄與하는 것이 笔者の 意圖이다.

し作成したことを明らかにして置く。

I. まえがき

特殊な場合(孤児・棄子)を除いたすべての人間は親と関係を持つ。父と母は子供を愛情と保護と権威を持って、長期間やしなうことに対して、子供は信頼と尊敬を持って依存しながら成長する。こうした関係は、日本のことわざ『親と子供は銭金で買われぬ』と韓国『근원 뱀 칼이 飲고 균심 없앨 야이 飲다.』の表現に見られるように、父母と子供の間の人倫を財力でも買うことが出来ないことである。また、親子関係は、死んだあとにも引き続く運命的な共同体であって 切っても切れない、つまり断絶が不可能な深くて重要な意味を持つ関係である。

こうした親子関係の基本的な條件は、一対の結婚した男女とその間に出生した実質的な親子関係が典型的であるが、その他、直接的な血縁関係のない養子と継子との関係もこの関係に属するのである。

ところが、ここでは数的にも大部分をしめている血縁的な親子関係とあるかた親の再婚から生ずる継母と継子との関係に対することわざを中心にしてその関係が、ことわざの中にどのように反映しているか具体的に見るのがこの論文の目的である。

そして、韓日両国のことわざ研究における地域的な特殊の事件のため問答資料集である

1. 韓国民俗学年鑑(韓国民俗学会編)
2. 俗諺辞典(李文基編)
3. 韓国の俗諺(李文基編)
4. 故事ことわざ辞典(鈴木栄三外一人編)
5. 新説ことわざ辞典(大俊美保編)

に採集・収録されたことわざの 資料を使って分析

II. 親と子

成熟し健康な 男女は夫婦として子供を生む能力を持っており、そして子供を持って親になるのが人間的にもきわめて自然なことである。

しかし、子供を出生して養うことは経済的にも、労働と時間にとても大きな負担になるが、それと同時に子供による犠牲は子供を持てない人は経験することが出来ない豊かな人間性を形成することが出来るのである。

故に、子供のない夫婦だけがなしとげた集團は厳格に言えば完全な家族ではないとさえ言えるであろう。

『男子七人あれば長者』と言つ日本のことわざのように、両国の伝統社会においてもすめより、多男を願ったのは周知の事実であるが、それは家の労働力の増大を意味するのだけではなく、後継者の候補者が多くて、心理的に、より安全だとすることでもあった。いいかえれば『多男の所有』は家の繁栄を表していることであった。

しかし、庶民にとって、多数の子供を養育するのが経済的にも時間的に側面からも大きな負担と損失を意味することである。

したがって、両国の庶民たちにおける理想的な子供の数は、韓国のことわざには表されていないけれども。

- ① 負わらず借らずに子三人。
- ② 三人子持は笑うて暮す。
- ③ 子三人子宝。

- ④ 余らず過ぎず子三人。
- ⑤ 三人の子持母は笑うて育て一人の子持母は泣いて育てる。
- ⑥ 後前息子に中娘。

と言った日本のことわざの表現を見てわかるよう『2男1女』即ち、三人が理想的であったそうである。

韓国でも昔から理想として思って来た最小限の子供の数『2男1女』であった⁽⁶⁾。

こうした『2男1女』の具体的な原因は、最小限親としてしたいことを全部することが出来るからである。即ち、長男は結婚させ自分らと共に住み、次男によっては花嫁をむかえ分家させ、娘によっては婿という『他人の男子』をも持つことが出来るのである。これは子供を持っている人しか出来ない親としての特権なのである。

このように、両国は共通的に『2男1女』を理想的な子供の数として感じて来たのである。しかし子供を持つことによって、親に生ずる苦衷と負担は思ったよりも莫大なことであった。

- ① 子は三界の首枷。
- ② 子を生みや苦を生む。
- ③ 子を持てば七十五度泣く。
- ④ 子供だましの親泣かせ。
- ⑤ 親煩惱に子畜生。
- ⑥ 親は辞儀する子は手出す。
- ⑦ 親の心子知らず。
- ⑧ 親の思う程子は思わぬ。
- ⑨ 親は思えば子は糞たれる。
- ⑩ 親を尋ねる子は稀な。
- ⑪ 자식은 애물이다.⁽⁷⁾
- ⑫ 가지많은 나무 바람 잘 날 없다.
- ⑬ 시에 말에 친 친친다.
- ⑭ 햇데면에 터썩거리 엣아면 날고 뛰는 꿈도 민 수 없다.
- ⑮ 꾸모속에 부처 들어 있고 자식속에 양을 들어 있다.
- ⑯ 정독의 때는 벗어도 자식의 때는 못 벗는다.

以上のように、日本人は子供と言うのは非経済的であり、質問だけするというめんどう臭くやっかいな存在であると同時に、親の深い恩愛と苦心も全然

(6) 李光奎「韓國家族構造分析」p.173. (1977年)

(7) 子はやっかい物という意味

理解せず勝手に不良な反抗行動をふるまう苦労のたねである。また、子供は親の一生の自由を束縛する邪魔な存在であると表現している。

こうした反面、韓国は子供を労働と時間からしても大きな犠牲、そして苦痛と心配をもたらすばかりではなく、自分のあやまつた行動に対する責任を軽嫁させる不安の連続体だと表している。

こうした表現の大部分が神経質の極限状況において対立した時に反映された意思であると思うが、このような断定的な表現の中に子供に対する否定的な拒否反応意識があることは除けないのである。つまり、言いかえれば、憎悪と愛情が交差された微妙な感情が介在している複合の矛盾性を持った二重的・思想を見ることがある。

しかし、親は

- ① 我が子荷にならぬ。
- ② 子と寧丸は荷にならぬ。

と言う日本のことわざのように、どんなに負担が加重され苦しい苦衷がともなうものだと言っても、その苦痛をくるしいことと思わず自分の子供は従属された自己身体の一部分として見るのが親の心である。

むしろ、

- ① 無い子では泣かれぬ。
- ② 子無しに子をくれるな。
- ③ 子の無い者は人でない。

と言った日本のことわざの表現のように、子供がなければそうした苦痛も経験することが出来ないし、また、子を持った経験のない人は、子を愛する心を知らないのであり、人間でもないと言う表現は子供を持つということが子供を持たない人にくらべて人間に豊富な生活の経験を蓄積することが出来ると言う当的な考え方たが底辺にしかれていると解釈しうるのである。このように親は子供から来る負担や苦難を最大限に、合理化し当為化することによって試練を克服しようとする思想がよく表されていると言えるであろう。

そうして親は

- ① 子に過ぎたる宝なし。
- ② 千の倉より子は宝。
- ③ 持つべきものは子。
- ④ 運は子にあり。

と言う日本の表現を見てもわかるように、当然に持つべきものが子供であり、これよりも重要な宝物もないし、親の将来の幸・不幸の運も、これによって左右されるということまで表現している。

もし親が子供をすべて行く場合、親の心情は、

① 발자국마다 피가 고인다.

②棄てる子も軒の下。

と言う向日のことわざのように、言葉では表現することが出来ない程、苦しいことであり、たとえ、棄てる子であっても、雨とか雪にあたらないように、軒の下を運ぶのが両国の共通な父母の愛情である。

こうした親の子供に対した愛情に関したことわざを見ると

- | | |
|---|---|
| A | ① 어둔산 아버지 환갑된 아들에게 차조심하라 한다.
② 父母は唯疾を之憂う。
③ 親は何時までも子供のように思う。
④ 내 땅의 까마귀 겉에도 귀엽다. |
| B | ⑤ 일 손가락 깨물어 어느 손가락 아프지 않을까.
⑥ 不孝な子も可愛い。 |
| C | ⑦ 흥년에 어미는 굽어죽고 아이는 배터져 죽는다.
⑧ 親は木綿着る子は錦着る。 |

以上のような例を上げることが出来る。このように親は自分の苦労のたねである子供に対しても心配しているし、みにくい子であってもすてられないほど重要なものであり、自分よりも子供の身边を思うくらいなのである。

どんなに見にくくて親不孝な子であっても 可愛いのであり、それから、たべる食糧のない、ひどい凶年の場合であっても自分の犠牲をはらって子供に食べさせるのが親の純粋な愛情なのである。

また、親の愛情が行きすぎた場合には、

① 부모는 자식이 한자만 하면 두자로 보이고 두자만 하면 식자로 보인다.

② 자식은 대자식이 커 보이고 악식은 남의 곡식이 커 보인다.

③ 내 땅의 까마귀는 점아도 귀엽다.

④ 親に目無し。

⑤ 恋の闇が一番怖い。

⑥ 子にひかるる親心。

⑦ 我が子には目がない。

⑧ 親馬鹿子馬鹿。

⑨ 我が子の悪事は見えぬ。

⑩ 子の悪いのとぼんのくぼは見えぬ。⁽⁸⁾

と言った表現のようすに、親は理性を失うようになり、思慮分別力さえ滅退し、自分の子の醜さあるいは誤、などは目にみえないものである。⁽⁹⁾ そればかりではない

① 子の命は親の命。

② 立てば歩めの親の心。

③ 親の欲目。

④ 子の甘いは親の常。

と言ったことわざの表現を見てわかるように、親は子の身のうえに起った死活問題は自分にとっても同様に死活問題であると思ふ、それと同時に一日も早く自分の子が成長するように切なる心を親は持っているのである。

そして子供がかわいいため 実際以上にひいき目に見ることであつて

① 我が子自慢は親の常。

② 아버지는 아들 잘 났다고 하면 기뻐하고, 형은 아우보다 더 났다고 하면 노한다。

と言うことわざのように、いつも親は自分の子供に対してほこりを持っており、他人からもほめられるのを期待するのが親の心なのである。

そして

① 자식추기 반 미친부.

② 운동이로 생긴 놈 계집사랑

반류으로 생긴 놈 자식자랑.

と言った韓国のことわざのように親たちに子供に対したほこりを自ら戒めよう教訓的な表現も生じたのである。

このように親子の愛情関係は子供を独立的な個体として見るのではなく、自分の従属体として認める親の一方的で盲目的な愛情を土台に凝結されていると思う。

そうした親子関係は対等の関係である横的な関係ではなく、不平等な上下の垂直的な構造を成しとげている非合理的なものであり、感情的な関係だと思う。

しかし、親の盲目的で一方的な愛情だけで子供が

(8) 本來長野県のことわざで、親はわが子かわいさため、子の誤りがわからないということ。

(9) このような意味を持っていることわざは前のこの以外に、「子の可愛いには嘘はない」「子の愛盛りには嘘も物言へ」ということもある。

十分に自主的な社会人として成長することは出来ないものである。

行きすぎた溺愛および過保護はむしろ子供の成長過程において、その子供を反抗的で不良にすることもある。つまり、社会に適応することにおいては、大きな悪影響をおよぼすのである。

それで教育と叱責も必要であり、親の過保護を禁ずる思想が絶対的に要請されるのである。

まず 親の溺愛から生ずる病理的な要素は次の日本のことわざによく表されている。

- ① 親の甘いは子に毒薬。
- ② 親は慈悲する子に糞たれる。
- ③ 親の甘茶が毒になる。
- ④ 甘やかして子を捨てる。
- ⑤ 親のほんそ⁽⁹⁾は他人が憎む。

と言うように、子供に対する過保護及び愛情は有害無益ばかりではなく、子供が無礼なものになり他人からの情悪も生みだし、またそれは愛ではなく子を棄てるようになるとと言う極端的な表現までしながら過剰愛情は禁物であると警戒している。

また、韓国の『내 미워 기른 아기 남이 뜬다』と言うことわざの表現も『親のほんそは他人が憎む』というのとは、文章表現が逆になっているが日本と同じように子供に対する溺愛は子供の教育の有害毒素であって禁ずるのがよいと言う意味を持っているのである。

言い換えれば、韓日両国は共通に過保護は有害な毒素なので禁ずるのを絶対支持する立場であるのと同時に厳格な家庭教育の必要性を強調する思想が根底にしかれていると思われる。

子供の教育に関するこを見ると

- ① 돈모아 줄 생자랄고 자식 글 가르쳐라.
- ② 황금 친냥이 자식교육만 못하다.
- ③ 남의 자식 흉보지 말고 내자식 가르쳐라.
- ④ 子供は教え殺せ馬は倒い殺せ。
- ⑤ 子を養って教えるは父の過りなり。
- ⑥ 父母その子を養って教えるはこれその子を愛せざるなり。

このように、経済的な遺産である財力よりも精神の遺産である教育が必要であり、教育は出来れば徹

(9)西国で秘藏子、愛兒を意味する方言である。

(10)トウガラシのことを意味する。

(11)大便のことを言う。

底させるほうがよいと言う意識が共通にあり、特に、日本のことわざでは子供を教育させないのは、親のあやまりと同時に愛情も持っていないことだと強烈に表現していることは見のがせない特異なことだと思われる。

このように両国人は子供に対する教育の絶対必要性を感じているのみならず、それを強調しているのである。

こうした子供教育の方法を具体的に見ると

- | | |
|---|---|
| A | <ul style="list-style-type: none"> ① 아이 말도 귀담아 들어라. ② 許은이는 괸시해도 아이 괸시는 하지 않는다. ③ 十五過ぎて子の意見 |
| E | <ul style="list-style-type: none"> ① 세상 모르고 약은 것은 세상이 넓은 못난 이만 못하다. ② 可愛い子に施をさせよ。 |
| C | <ul style="list-style-type: none"> ① 엊물이 밟아야 아랫물이 맑다. ② 아이 앞에 찬 물도 못 마신다. ③ 親が嘘吐きや子が嘘ならう。 ④ 親を習う子 |
| D | <ul style="list-style-type: none"> ① 예쁜자식 때로 키운다. ② 귀한 자식 때 한대 더주고 미운 자식 떡 한개 더 준다. ③ 可愛い程叱る ④ いとし子は木尻に置け ⑤ 親爺と南蕃⁽¹⁰⁾は辛い程いい ⑥ 親の奥歯で噛む子は他人が前歯で噛む。 |
| E | <ul style="list-style-type: none"> ① 땅치가 귀여우면 못이 치는다. ② 慈悲をすればはこ⁽¹¹⁾をする。 |

と言ったことわざの表現を見てわかるように、子供の意見を無視あるいはなおざりにしてもだめで、苦労と難しさをあたえて上げてでも社会的な活動をうまく行くように広い範囲にわたって見聞を獲得させなければならないし、そして親はいつもいい手本を見せてやる教育的な態度が必要であり、それから、場合によっては厳格な叱責ときびしい罰で以て教育しなければならないのである。また、親が子をかわいがりすぎて必要な時にしからぬと他人からひどくしかられる不良の子になってしまふと表現している。

つまり、教育的な側面では厳格な教訓的な感度を

も親に要求しているのである。

このように両国人は叱責ときびしい罰をあたえることがあっても親の従属物ではなく、子供を正しく社会に適応することが出来る完全な自主的な人間として養育させるのが教育の最大の目標であり義務であると思っている。こうした両国の親は自分の子を愛しながらも親子の濃密な関係の弊害を十分に認識して親の戒めも堅持してきたのである。

このように、親の深層心理には、人間本来の姿である愛情保護と子を社会的な存在として成長させようとする厳格な教育的叱責の感情が ambivalence な形で共存している。

つまり子供を親が独自所有していると言ふことではなく、社会共同体が共有しているという思想が潜在意識の中に存在しているためであると考えられないであろうか。

III. 親と娘

父系家族の秩序が根深くおろしていた東洋における女性の位置は男性にくらべて見て、一言で言えば、劣勢と不利な地位を占めることであった。

家族の中での地位が劣等で社会的に活動が制限されていた男兒尊重の伝統社会における娘の社会的位置は。

① 男子七人あれば長者。

② 男の子三人金の綱。

と言う日本のことわざの表現にみられるように、むすこのそれよりもずっと低いものであった。

つまり、多男を持つということは、世代的継承を可能にする多数の後継者あるいは労働力、即ち『家の存続』の安定を意味することであった、それでむすこは娘とことなって金の綱のように、親にとってはたよりになって来たのである。

このように、息子が家の継承者として親の社会依存度が高いその反面、娘の位置は

① 딸은 두번 서운하다.

② 뱀아이 아들아니면 말이지.

③ 미운놈 보리면 멀 많이 낳아라.

④ 딸 셋을 계속 낳으면 부부가 잡자리 거꾸로 한다.

⑤ 七日小腹を病んでも男の子を生め。

⑥ 娘の子は果報持って生れる

と言ふことわざを見てもわかるように、出生からむすことよりも劣等な地位にあったことは否認することができない事実のように思われる。

即ち、娘は社会構造的側面と人間の情理的なことから親にさびしさを与えるのであって、両国の親たちはいかなる苦勞をする場合があっても、男の子を願っていたのである。

① 一姫二太郎。

② 첫딸은 세간밀친.

と言ふことわざもあるが、それは女兒のほうがむすことよりも育てやすく、育ちながらも母親の仕事を助けるという意味とともに、男の子を熱望したにもかかわらず女の子が生まれて失望するのを慰める言葉としても意味解釈が可能なのである。

そのように、娘は出生からなおざりにされたのである。そうしたことだけではなく

① 딸 삼형제 시집보내면 그루도Keith 아든다.

② 딸이 셋이면 문 열어 흥고 잔다.

③ 딸 셋을 여의면 기둥뿌리가 폐인디.

④ 盗も五女の門を過ぎらず。

⑤ 娘多きは貧乏神の宿。

⑥ 娘一人に七歳あける。

⑦ 女三人あれば身代が潰れる。

⑧ 娘の子は強盗八人。

のことわざのように、娘は多くの結婚費用で財産を浪費させて家がぼろびるほど負担をかけるやっかいな存在として表現されている。

娘は即ち、非良心的な俗物であるどろぼうさえ来る程、家を倒産させる程の貧困と密接な関係があるのである。

また、興味深い表現は娘→貧困→盜賊という風に図式化されているのは、両国のことわざがまったく同じであると言ってよい程よく似ている。

しかし、娘の結婚に際して使われる莫大な費用は、『個人対個人』の結婚でない『家門と家門』あるいはもう一步すすめて、当事者が所属している『社会と社会』との結合のために使用されたこととして理解すべきであろう。

娘の嫁入り道具の多さは、娘のほこりであるのみならず、夫の家においての娘の地位を上昇、安定させるのであり、それと同時に娘の背後にその家族と親族が存在しているのを明示する手段となる。

しかし、その根底には、そのような社会的な性格

よりも、自分の身体の一部分であるかのように、我が子を愛する親としての本能がそれをなさしめたということを忘れるることは出来ないと思う。

更に、

① 딸은 산자도자⁽¹²⁾

② 아들네 집에서 밥먹고 딸네 집에 가 물 마신다.

① 娘と糸縫麻⁽¹³⁾は側さ置く程邪魔になる。

② 娘の親でいつまでも厄介かかる。

のように、表面的には、娘を近くにおけるほど邪魔になるやっかいな存在であり、社会的に公認された盗賊だと表現している。けれども、その裏には息子に対するのと劣らない愛情があるからこそ、ゆきすぎる程の結婚費用をついやすのであり、実家の物をあれこれもって行っても、黙認せざるを得ないのだと見ることが出来る。

また『아들네 집에서 밥먹고 딸네 집에 가 물 마신다』という韓国的表现で、見られるように出家させたとしてもいつも親は娘の暮らしを心配しているのが親の心なのである。それで

① 茶湯子は目に入れても痛くない

② 蛋にも貞ねぬ大事のむすこ。

のように、むすこの重要性を表現したことにおとらず小娘と

① 小袋は油断がならぬ。

② 蝶よ 花よ。

③ 바비안 시집보낼려면 내가 가지.

の表現を見てわかるように、娘も花や蝶の如くに可愛いのであり、またほころびやすくて目が離せない程親にとっては貴重な存在なのである。

① 一人娘の可愛さとおいどの辯いとは堪忍ならぬもの。⁽¹⁴⁾

② 사위사랑은 장모사랑.

という表現は、娘の幸せのために他人の子供である婿まで可愛いくてはならぬ親の心を断続的によく表しているといえるであろう。

それから 親は、

① 滅愛昂じて尼になす。

② 秋のあらと娘の粗は見えぬ。

① 죽마은 설것이는 딸시키고 비침그릇 설것이는 미느리 시킨다.

② 오라는 말 아니오고 의동며느리만 온다.

③ 딸의 집에서 가져온 고추장。

と言ったことわざのように、溺愛したあまり、娘の来世の幸福まで願って尼にしてしまう場合もあると極断的な表現さえしていることもわかる。

そして自分の娘を一人嫁より、比較にもなれない程かわいがってどんなにみすぼらしい物であっても娘の家から持ってきたのであれば何でも重んじて使うのは言うまでもないことである。

そればかりか、娘の欠点さえ看過されがちなのが親の愛情である。

さらに

① 딸덕에 부원군(府院君).⁽¹⁵⁾

② 첫딸은 세간일천.

① 三人娘は一身代.

② 四十二の二つ子女子なれば家繁昌.

と言うことわざのように、娘はかえって家の経済を繁盛してくれる存在として描写していることも見られる。

それで

① 여식이 나가는 옹진⁽¹⁶⁾으로 보내라.

② 어머니가 좋으면 그 딸은 보지 않고도 내려 간다.

③ 娘を見るより母を見よ.

④ 娘は棚に上げ嫁は掃除から貢え

⑤ 娘は後で褒め.

と言う表現を見てもわかるように、韓国は娘に対しても徳望の高い婦女から教養教育を受けるように機会を提供してやらなければならないと女性における教育の必要性を強調している一方、日本も、娘を育てるには、箱入娘にして育てるがよく、ほめる時も通りすぎたあとがよいと言っている。もう一つ、

① 어머니가 좋으면 그 딸은 보지 않고도 내려 간다.

② 娘を見るより母を見よ.

という表現のように、娘は母親の仕事を助けつつ母から自分の家の家風をはじめ家事全般について、そのしきたりの手ほどきをされるなど、婦徳をみがくのであって、母親の人柄も娘の教育においてはみのがせない重要な要素であると両国ともに、主張し

(12) 娘は散炎どろぼう。散炎は祭祀の時につかう牛肉などでつくった食物。

(13) 糸縫麻は麻糸を巻いた玉を言うことで青森の方言。

(14) 以外に、婿に関しては「婿はむっ」という程可愛い・「尻瘡の痒きと一人娘の可愛いはやる瀬がない」ということわざもある。

(15) 王妃の父親あるいは正一品の功臣稱号。

(17) 熊川は慶尚の鎮海地方にある地名で、そこの婦女たちが德行の高く、礼儀ただしと言ふことから出来た言葉。

ているのもわかる。

そして、

① 아들 못난 건 세집반 방하고 딸 못난 건 양사 돈 망한다.

のような韓国のことわざに見られるように、娘に対してあやまつた教育は自分の家は勿論、相手の夫の家までほろぼすと強い表現さえしながら、娘の教育の重要性を強調したのであった。

このように、娘に対する親の愛情は実は息子に対したものと全く同一のものだと言っても、過言ではない。

ただ、前に述べたような娘の社会における劣等な地位は、親の本心から生じたものではなく『兄の物は猫の椀まで』と言ったように、男性には親の遺産を洗いざらい相続する特権があるけれども、その反面、女性には後継者としての権利と家長権がないことによると言えよう。

つまり、息子、その中でも長男中心の直系家族の構造による必然的な社会的所産によるものである。一方、娘はそのような後継者と家長という構造的権利義務がないので、純粋な形で親の愛情⁽¹⁸⁾に接することが出来ると思われる。

IV. 継父母と継子

継父母と継子との関係は、あるかた親の再婚によって新しい人間関係が生ずるのであり、その原因是、子供を持っていた親の離婚、離別、死別によるのが基本的な条件である。

両国のことわざの中の継母対継子の関係は

① 어머니가 의붓어머니면 친아버지도 의붓아버지가 된다.

② 의붓자식 나루나.

③ 자기자식에겐 할죽주고, 의붓자식에겐 죽여 안다.

① 我が子は豆の上に遊ばせろ継子はそばの上に遊ばせろ。

② 西北の風と継母はつめたい。

③ 継母の嘲笑い。

④ 継母の親切と嘲でっかり⁽¹⁹⁾は恐しい。

⑤ 継子の腹はいつもふくれぬ。

(18) 李光全「韓國家族의構造分析」, p.175. (1977年)

(19) 朝でっかりは朝天気がよいことを言う。参考に「継母のにっかりと嘲でっかりはあてにならぬ」ということわざもある。

(20) 継母がそう見せるのではなく継子がそう見せると言う意味。

のことわざの表現のように、継母が継子を冷たく虐待し、実の子と差別待遇をすることにおいて韓国・中国は共通な表現している。

そして、また、

① 의붓자식 뒷 배운셈.

② 甲由田中は筆者の誤り十点千字は継母の謀。

のように、継母は継子をよく思わないし、継子もやっぱり継母をひどく冷酷非情な存在として認識している。

しかし『悲しい時には継母の従兄弟も尋ねる』と言う表現があるけれども、この場合は継子が自分自身が悲運におちいった時には、平生行き来しない遠い縁者までたよろうとする即ち、自分の利益のためには常に持っていた継母に対したにくみと妥協する矛盾性を意味することであって、あくまでもこれは、継母に対した悪意は完全に、きりすてたことを表わしてはいないのである。

以上のことわざを見てわかるように、

その関係は、継母が一方的に継子を抑圧して虐待する優位な位置に立つが、의붓어미가 티를 내는 것 이 아니라 의붓자식이 티를 냈다⁽²⁰⁾ と言うことわざの表現のように、継母の権力行使は近所からの社会的な非難と継子の間接的な反抗のために制約され、阻止される場合も少なからずあるのである。

そして

① 母在りて一子寒く母去りて三子寒し。

② 余るに継子なし。

の表現で見られるように、継母から虐待を受けて寒い思いをする子はひとりだが、継母を離別すればそれが生んだ子二人をも合わせて三人の子が寒さに泣かねばならぬことである。

それから、以上のような継父母の虐待の原因は人格のことから来るのではなく、経済的貧困のためだと継子に対した継父母の冷待を社会的に多少認定している。

しかし、それと言って根本的な治療策が出たことを意味することではない。

コンチャイバッチャイ
「孝子贊美」と「薔薇紅蓮伝」そして『シンデレラ』と『白雪姫』の童話などが教えるように、継母と継子の関係はいかなる民族においても、いかなる人間の間においても避けることの出来ない宿命とも言える必

然的な問題をはらんでいる。

- ① 春の口と継母は呉れそうで呉れぬ。
- ② 継子立ての算用に等し。
- ③ 의붓아비 아비하蚱。
- ④ 의붓아비 떡치는대는 가도 친아비 도 틸릴 하는대는 안간다。
- ⑤ 가을에 내 아비제도 끗지내거든 봄에 의붓아비제 지낼까。

の表現で見られるように 継父母と継子との 関係が とうてい 解決するのが不可能であるかの如く表されている。

しかし、相互の理解によって円満な 人間関係を維持して行く家庭も少なからず見ることが出来るし、また、実の親子間にも不利や 葛藤がすくなくないことを考えて見た場合、継母と継子の 関係を短絡的にマイナスの イメージでのみかかえていると見るのは 社会的偏見だといえまい。

V. あとがき

今まで、両国 の 俗談にあらわれた 親子関係に関する意識を分析・検討して見た結果、次のような結論を得ることが出来た。

まず、親の 心理的な深層には人間の ありかたである愛情保護と 社会的な性格である 厳格な教育的叱正の感情が両存するを *ambivalence* 形成している。

これは本質的に親の愛情の 土台の 上に子供が社会の共有物という 意識が深層の基底に強く介在していること。

二番目は、一般的な民衆の通念であるむすこにくらべてむすめの劣等な地位は後継者と 家長という権利のない男性中心の社会的な構造から 生ずることであって、『秋のあらと娘の粧は見えぬ』『母의 짐에서 가져온 고추장』のように、親の 心理の 深層構造から生ずるものは絶対にないということである。

三番目は、『자기자식에겐 팔죽주고, 의붓자식에겐 콩죽먹인다』『継子の腹はいつもふくれぬ』と言ったように、継父母と継子の 不和・葛藤は根本的に解決することが出来ないことではなく、相互間の理解・努力によって 円満に解決することが 出来る関係で

あることをはなしてみたい。

以上のように、本稿では韓日両国の 親子関係意識について異質的な面より、共通な面を中心にして考察して見た。

これからも両国のことわざ研究の範囲をひろげて、共通の 類型はいうまでもなく、異質的なものもさがして比較研究して見る十分な價値があると思う。

また、現在、両国民の 実際生活において使われる ことわざの 頻度数にした 調査も行なわなければならぬし、次第になくなつて来ていることわざの 採集もともにするべきであろう。

そして、本研究のはばを拡大して、親子関係だけでなく、夫婦・嫁と姑・兄弟関係等の 研究課題は次回の機会にして見たいと思う。

参考文献

- 金道煥『韓國俗談의 心理的分析研究』釜山師大論文2輯(1975年)。
- 權榮圭『俗談을 통해 본 우리민족성』中央大論集・第12輯(1977年)。
- 康壽彦『韓・英語の俗談比較』제주대 학논문집 제9집(1977年)。
- 李乙煥『韓國俗談의 文法構造研究』아세아여성연구 10집(1971年)。
- 金宗澤『俗談의 意味技能에 관한 研究』국어국문학(1967年)。
- 青山秀夫『朝鮮語語の俚諺の用法について』朝鮮學報第89輯(1978年)。
- 柳田国男『なぞとことわざ』談談社学術文庫(1978年)。
- 中根千枝『家族の構造』東京大(1979年)。
- 李光奎『韓國家族의 構造分析』一志社(1977年)。
- 藤井乙男『夢の研究』講談社(1978年)。
- 鄭寅淑『韓日両国の ことわざの形成と内容』アジア公論、5月号(1981年)。
- 李圭泰『俗談에 비친 韓美人의 特性』啓明大碩士學位論文(1980年)。
- 柳寅昶『俗談에 나타난 韓國人の 生活觀』東國大・碩士學位論文(1981年)。
- 稻垣長典『家族関係学』東京光生館(1969年)。